
地獄の階段

白駒の池

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の階段

【NZコード】

N7219M

【作者名】

白駒の池

【あらすじ】

ぼくがおかあさんに突き飛ばされて石段から転がり落ちて骨折して入院した病院で、36は必死で何かに耐えながらやつてくるであろう死の時を待っているようだった。

36が死んでしまうような病気なことをぼくは薄々感じてはいたのだけど、ぼくの涙に36は大人の男になるための勇気をくれたんだ。でも、ぼくはたったひとつの男の約束を破ってしまった。

36の涙の訳を36を訪ねてきた男の人に話してしまったんだ。ぼくは大人の男にはなれなかつた。

36の涙

夏の暑い日だった。

家にいるとおかあさんに嫌われるから、ぼくは、虫取り網と虫籠をもって朝早くから長い石段のある公園に毎日出かけていたんだ。ぼくたちの間では「階段公園」って呼んでいた。

本当の名前は「立石公園」と云つただけど、誰もそんな名前では呼んでいなかつた。

ギラギラした太陽の下、ぼくは毎日走りまわっていたのだけど、ぼくは誰かに背中を思いつきり押されて、気がついたときは階段の下まで転がり落ちたんだ。

そして、次にいたのは病院のベットの上だった。

警察の人にいろいろ聞かれたけど、ぼくは転がりおちてゆくその時に石段の上で、怖い顔をしたおかあさんを見たんだけど、でも、誰かに押されたことも、おかあさんを見たことも決して誰にも言わなかつた。

言えなかつた。ほんとうに怖かつたから。

ずっと前からおかあさんが怖かつた。

ぼくのおとうさんはぼくが生まれる前にぼくとおかあさんをおいて、べつの人の人と出て行つたんだときいたことがある。おとうさんが欲しかつたけど、おとうさんの話をすると、おかあさんは、ものすごく顔をしてぼくのことを怒るから、ぼくは絶対におとうさんの話はしなかつた。

おかあさんは朝早くから遅くまで働いて、毎日のよひに溜息ばかりついていた。

溜息をつくと、幸せがそのたびに逃げてゆくんだ、と学校の先生が言つていたのだけど、おかあさんは、毎日毎日たくさん溜息をついていた。

ある日学校から帰り、アパートの部屋には、布団の上に汗をかいた疲れたおかあさんと、知らないおじさんが寝ていた。
あわててぼくはドアを閉めてその場所から立ち去ったんだ。

そんなことがあって、ぼくはおかあさんに突き落とされたんだ。
長い石段の上から。

おかあさんはぼくが邪魔だつたんだと思つ。

ぼくが入院した病院でおかあさんは、
「足の骨なんか折つて」
と言つた。心配しているとは思えなかつた。

ぼくが車いすで病院の中を動けるようになつた時、ぼくの病室の前の部屋に一人の男の人に入院してきた。

「いくつ?」

その人はドアを開けたままの一人ぼっちの病室から、ぼくをのぞきこんでそう言つた。

「8歳」

ぼくがそう言つと、その人は、

「俺、36」

と言つた。で、その日から、ぼくたちは

「よつ、8歳!」

「なんだよー36ーー!」

とお互いを呼び合つようになつたんだ。

後から気がついたんだけど、36はいつもドアを開けたままにして、誰かが来るのをずっと待つていたんだと思つ。いつも、ドアの外を気にしていて、物音ひとつ聞き逃さないよつにしていくよつに思つたんだ。

それから、何日かおきに女人が36の部屋にやつてきて帰つて行つた。短い時間で、話をしている風でもなく、あれが36の奥さんなんだと思ったけど、36はちつとも楽しそうじゃなかつた。

36が待つているのは、奥さんじやないんだな、と8歳のぼくにだつてわかつたさ。

ぼくのところへも36のところにも決して待つてゐる人は来てくれなかつたんだ。

ぼくのところに学校の先生が来た日だったから4月20日だったけど、36の部屋はずつとドアが閉まつていて、何かあつたかと思つていたら、そこから怖い顔をした男の人が出てきた。あわててぼくは廊下の隅に隠れたんだけど、その時、その怖い顔をした男が言つたんだ。

「ヤツには無理ですね・・・」と、36に何が無理だつたのかはぼくにはわからないけど、そのあと、36の部屋からは36が枕か何かに顔を押し付けて泣いている声が聞こえたんだ。ぼくといつしょだつた。おかあさんに聞こえないようにぼくは毎晩そうやって泣いていた。だから、あれは絶対36が誰にも聞こえないように必死で枕に顔を押し付けて泣いていた声だと思つ。

36はその日からしばらく部屋のドアを開けなかつた。

みんなの涙

ぼくが次に36を見たとき、36は本を読んでいた。あんなに廊下からの物音を気にしていたはずなのに、いつの間にか、廊下なんてどうでもいいという風だった。

そして、読みかけの本を膝にのせて、遠く諏訪湖が見える大きな窓を見つめていた。

ぼくの存在なんてどうでもいい、というのが気に入らなかつたけど、何がおもしろいのか、必死で本を読んでいた。

36のところには、奥さんらしき女人と、友達だつていう男がよく来ていたんだ。

けど、ぼくはその男があんまり好きじゃなかつた。36はいつも、車いすでエレベーターの前まで見送つて、「また、きっと」って言つて別れていたんだ。

でも、ぼくはとてもとても36が気になつていて、とりとつその男に話しかけてしまつた。

ぼくが、ようやく松葉杖で入院していたフロアをあるかるようになつたあの日。

あの日、その男は男のくせに涙を流してエレベーター前の椅子に座つて泣いていた。

36は必死で声を殺していたけれど、その男は、もう、廊下に響きそうな勢いで泣いていたんだ。

ぼくが、

「36は声なんてださないぜ。」

と言つたら、36の意味がわからなかつたらしくて、驚いた顔をしていた。

後でわかつたけど、ちょうどその時、36は検査でどこか別の階に行つていて、張り詰めていた気持ちが急に緩んだんだそうだ。

「大人のくせにだらしないな。」

そう言つたら、あわてて小さなタオルで顔を拭いていた。

ぼくが、この間、いつも開いている36の部屋のドアが閉まって、中から、36が枕に顔を押し付けて、声を殺すように泣いていたんだ、と教えたらい

そいつは絶対に誰にもその話はするな、と言つた……。

「格好悪いだろ。男が泣いていたのが誰かにばれたら……。」

つて。

「おじさん、名前は？？」

「おれか。おれは堺良一。」

克己の友達や。」

「ふうん。俺、井上達也。」

「聞いてもいいかな。」

堺が話し始めた。

「克己は、あ、36はよく泣いているのかい？」

「…………」

「36と俺は長い付き合いなんだけど、36は入院しているだろ。泣かれると困るから、あんまり聞けないんだよ。」

「そつか。」

前はね、ドアを開けて、誰かが来るのを待つていてるようだった。でも、怖いおじさんが2人来て、そのあと、36の部屋はいつもドアがしまつてているようになつたんだ。」

「こわいおじさん？」

「そう。怖いおじさん。」

堺は何か気がついたみたいだつたけど、ぼくはまだ、それがなんだつたのか理解できるほど大人じゃなかつた。

「克己とは仲良しなんだね。」「

「別に仲良じじゃないさ。」

ぼくがそう言つと、克己はね、ゝゝ、とそいつが話し始めたんだ。

「克己はね、ちょっと頑張りすぎちゃつたんだ。で、足がぼきつと根元から折れたのさ。」

君は足首、克己は太もも・・・。いっぽい走つて転んだのかい?」

そいつはぼくの足のことを聞いたけど、まさかおかあさんに押されたなんて言えなくて、黙つていたら、

「聞いちやまづかつたのかな。」「めんよ。」

つて言つた。

そしたら、ぼくは、どうわけかたまらなくなつて涙がたくさん出たんだ。

おかあさんことを黙つているのがこんなに辛かつたのかな。

ぼくはあんまり好きじやなかつたそいつの胸の中で、ほんとうにほんとうにたくさん泣いたんだ。。

どれくらいたつたかな。しばらくして、36が車いすにのつて、エレベーターで帰つて來たんだ。

ぼくがあわてて涙を拭いたら、36はこう言つた。

「見てないから大丈夫さ。泣けばいい。」

ぼくの涙

堺つていうかよつと嫌いな奴と話をした。何がいやだつて説じやないんだけど、あるでしょ、なんとなくいやな奴。ぼくことつては堺つていう男はなんだか好きになれない、そんな感じだつた。でも、堺はいろいろきいてきたんだ。

「克己はなんで泣いていたんだろう」「う」とか、

「ちょっと怖い2人つてだれだろう」「う」とか、

ぼくはそんなことどうでもよかつたんだ。それよりもぼくが泣いているところを36に見られたことがなにより苦痛だった。でも、

「泣けばいい」

そつ言われて、ぼくはほつとした。あの日、立石公園の石段の上でおかあさんに背中を押されて以来、ぼくはずつと、気持ちを張つて生きてきたんだ。

何があつたのか言えるかい?

36はぼくにそつ言つと、36の病室の大きな窓ガラスの向こうつをずっと見つめていた。ぼくが、

「あのね、窓ガラスの向こうに何があるの?」

と聞くと、36はハツとした顔になつて、

「何もないぞ」

そつ言つたんだ。

しばらくして、ぼくは言つたんだ。

「おかあさんに押されたんだ……。石段の上で……。

それで足が折れたんだ。

退院したら、ぼくは殺されるかもしない。」
つて。

ぼくがぼくの周りであつたおかあさんことを話したのは、この時
が最初で最後。36は黙つて聞いてそして言つたんだ。

「黙つて、一人で生きていけ。」

つて。ぼくは、36の病室で一人また泣いた。甥つて奴がいたらぼ
くは絶対に誰にも話さなかつたさ。でも、36には話してしまつた
んだ。

「俺も。」

36は窓ガラスの向こうに視線をやりながら、そう言つたんだ。

「俺も、黙つて一人で生きているぞ。」
と。

それからじばらくして、ぼくの退院が決まった。

おかあさんが先生に呼ばれて、久しぶりに病院にやつてきた日、ぼ
くはずつと朝から36の部屋に隠れていた。

看護婦さんが36の部屋をのぞいて、

「前の部屋の井上君見なかつた??」

つて聞いた時、36は、「いや」とだけ答えて、「今日はあまり氣
分がすぐれないでの、ドアを閉めておいてください。」

と言つてくれた。実際、36はあまり調子が良さそには思えなか
つたけど、ぼくは、どうしてもおかあさんの顔を見たくなかつたん
だ。36は、ぼくに向かつてこう言つた。

「しつかりしる。お前のおかあさんじゃないか。」と。

でも、ぼくのおかあさんは、ぼくを殺そうとした。ぼくはやつ思つ

てこるから、どうしても、会いたくなかったんだ。

ねえ、ぼくにはこれから先の未来があるんだろうか……。

つて言つた時、36は言つたんだ。

あるよ。

つて。

その日、急に、本当に急に退院することになったんだ。
正確に言つと、お金が払いきれなくて、病院から追い出されたんだ
けど、

部屋を出てゆくやの時に、

ぼくが、36の部屋を覗き込んだその時に、
36の部屋は、諏訪湖の見えるその窓が大きく開かれて、
カーテンが怖いくらいになびいていたよ。
一瞬、そこから飛び降りたのかと思つたほどだつたよ……。

結局それっきり会つことはなかつたけど、

36はずつと誰かを待つていたんだと思つんだ。
もつ、確かめようがないんだけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7219m/>

地獄の階段

2010年11月24日13時45分発行